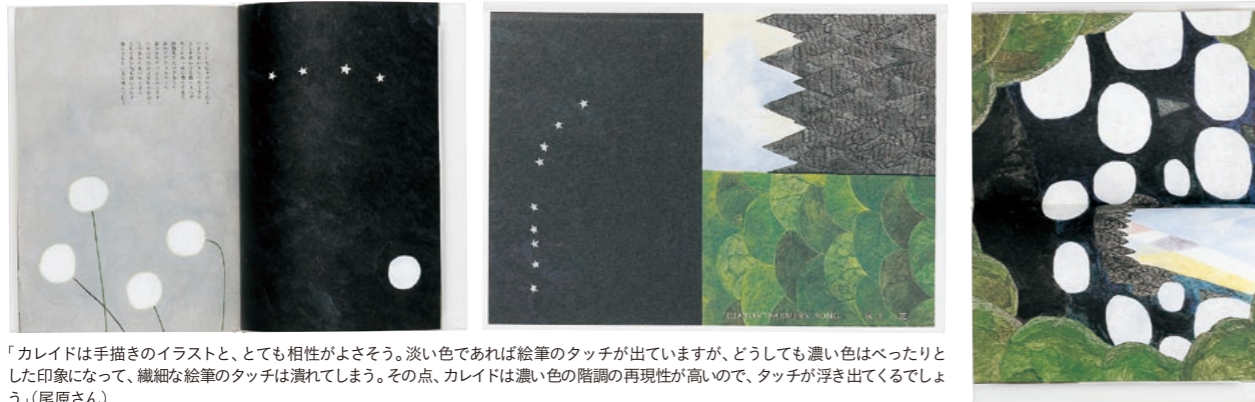


服の多彩な色や素材感のディテールを引き出すために



「洋服は数多くの色が存在していて、色の階調も細かい。従来は青と黒の間にある濃紺などは色の調子を出すのが難しかったのですが、カレイドならその部分の階調が出てきますね。また、シアンが発色が鮮やかになるため、にこりがちなビビッドな色が実物に近い印象になります。ファッション媒体にとっては、頼りになるインキです。」(尾原さん)

イラストの絵筆のタッチをより浮き出すために



「カレイドは手描きのイラストと、とても相性がよさそう。淡い色であれば絵筆のタッチが出ていますが、どうしても濃い色はべったりとした印象になって、繊細な絵筆のタッチは潰れてしまう。その点、カレイドは濃い色の階調の再現性が高いので、タッチが浮き出してくるでしょう。」(尾原さん)

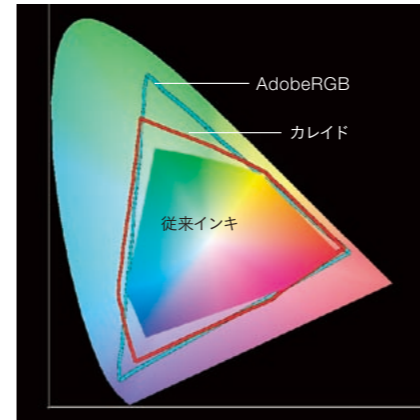
コントラストの強い写真をよりプリントの色調に近づけるために



「上の写真は背景と濃紺のスカートのコントラストが強いため、色校正がとても難しい。淡い色を優先すると、濃い色はつぶれてしまう傾向があります。濃い色の階調も再現できるカレイドなら、例えばスカートのひだでできる影の部分など、調子が出やすくなるのではないのでしょうか。」(尾原さん)

①『SHIPS 2010 F/Wカタログ』SHIPS ②『IHATOV' FARMERS' SONG』PLANCTON ③『100 Children』PLANCTON

尾原流、カレイドの使いどころ



●カレイドインキとは？

従来のプロセス4色印刷では再現できなかった、RGB画像の広い色領域の再現が可能になるプロセスインキ。下の図からも、パソコンの画面上で見ると近い色領域に、4色印刷でありながら限りなく近づいているのがわかる。たとえば東洋インキのカラーチップでいえば、従来インキで再現できたのは750色、一方、カレイドインキなら900色を再現できる。カレイドインキの4色印刷で、特色インキを使った6~7色印刷に近い範囲をカバーできるという。

カレイド



従来インキ



●AdobeRGBに対する再現性

カレイドインキが再現できる色領域で尾原さんがとくに注目したのは、沈みがちなピンクがきれいになるようになり、潰れやすい濃い色の階調が再現されるようになる点。上図からもそれがよくわかる。RGBの色領域のなかで再現できないことを示すグリーンの部分が、カレイドの場合は格段に少ない。



アイデアを探る、色巡礼の旅

尾原史和の Color Trip #9

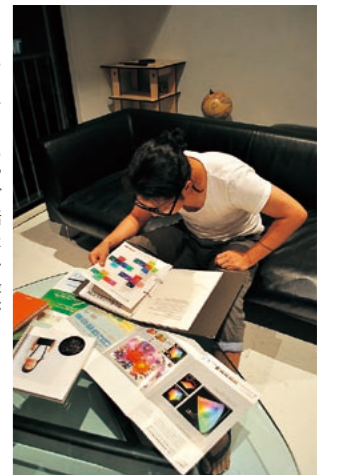
9st Trip インキの色

文・海田文 写真・協力・尾原史和

今回はエディトリアルデザインの原点に立ち返ってインキの色について考えます。現在、従来のプロセス4色印刷でできる色再現を大きく超えるインキが登場しています。そのひとつである、東洋インキのカレイドシリーズについて取材をしてきました。

広演色プロセスインキ “カレイド”で広がる色の世界

**尾原史和**  
OHARA Fumikazu  
1975年高知県生まれ。1999年建築家らとともにSOUP DESIGNを結成。現在はグラフィックと建築にわかれ活動。グラフィックでは雑誌や書籍、展覧会やカタログなど本を中心として活動中。2009年には新たにマルチブル・レーベルPLANCTONを開設。最新作として靴「plain」が発売中。



知られざるインキの最新事情

アートディレクターがインキそのものについて知る機会も、意外にも少ない。そのため、エディトリアルデザイン周辺の技術が新しく変わっていく中で、「インキには何か変化があるのか」という初歩的な疑問をもちました。さっそく、「ここを起点に東洋インキへ取材をしてみると、「オフセット印刷に使われる標準的なプロセスインキの色相は、ここ10年ほど変化はありません」との答えが返ってきました。その背景には、インキに使用できる色材の諸事情があります。さらに2001年にプロセスインキの標準印刷色「ジャパンカラー」が決められ、メーカー間にあった多少の色の違いは、ジャパンカラーに集約されていきました。やはりインキについては、知らないことが多いようです。

ほかにも、興味深いインキの最新情報を教えてもらいました。そのひとつが、広演色枚葉プロセスインキの登場です。東洋インキからリリースされているのは、カレイドシリーズというものです。このインキを使えば、4色でもパソコンの画面上におけるRGBの色再現に近い印刷が可能になります。うまく使えば、これまで苦労していた部分の色がきれいに出てくれるよう、期待です。もうひとつがUVインキの進化。従来のUVインキは、油性インキよりも色の再現性が劣るとされてきました。けれども、東洋インキが新しく開発した高感度UVインキは、色に差がないそうです。また、油性インキの場合、インキの乾燥が進むと色が予想以上に浅くなるなど、刷り上がり直後と納品時の色のブレに肝が冷えることがしばしば。その点、速乾性が武器のUV印刷であれば、先ほどのような色のブレは起こりません。そこに、色の再現性も加わるのですから、ADとしてはうれしいニュースです。インキの特徴を知ること、デザイナーの幅を広げる大切な知識といえます。



〔インキの基本用語〕

●プロセスインキ…オフセットインキの一種。3原色のシアン(C)、マゼンタ(M)、イエロー(Y)に、ブラック(K)を追加した4色で構成される標準的なインキ。多色刷りの基準色で、この4色を掛け合わせることで幅広い色が再現できる。

●ジャパンカラー…オフセット印刷におけるCMYKのプロセス標準印刷色、またはそれを纏めた印刷見本を指し、1993年に初版、2001年・07年に改訂版が発行された。2010年にはオフセット枚葉印刷における標準印刷色「枚葉印刷用ジャパンカラー2007」を基準とした認証制度(主に印刷会社向け)も始まり、印刷資材から印刷現場まで統一する色基準が整えられた。

●UV印刷…UVとは紫外線のこと。紫外線を当てるとすぐに乾燥するインキのことをUVインキといい、そのUVインキで行う印刷をUV印刷という。刷った後に紫外線を照射してすぐ乾燥させるため、印刷の工程をスピーディーに進められる。ちなみに、油性インキの場合はインキを乾かすのに1日以上が必要。

Idea Note of Colors 色のアイデアノート

- 広演色インキや高感度UVインキなど、インキに関する新しい動きについても意識しておくことが大切。
- カレイドシリーズは濃い色の階調などこれまで調整の難しかった部分の色が再現できるようになる。
- インキの特性について知ると、デザインにおける色の効果について再考するきっかけになる。